

麥生田兵吾 写真

櫻井拓 編集

大西正一 デザイン

2019年8月30日[金]—9月15日[日]

11:00—19:00 \*金曜日のみ11:00—20:00, 月曜日休廊

主催：像を耕す 協力：Gallery PARC 助成：アーツサポート関西

SNS 麥生田・櫻井・大西の在廊情報や、その他突発的なイベント情報などは下記のSNSで随時告知します。

Twitter : @c\_imagery

Facebook : @cultivated.imagery

Instagram : @cultivated.imagery

写真家・麥生田兵吾(むぎゆうだ・ひょうご／1976年・大阪生まれ)は主題として「Artificial S」を掲げます。

この「S」は“Sense＝感覚(感性)” “Subject＝主体” あるいは“Es＝無意識”などの複数の意を持つもので、「Artificial S」は『人間の手によりつくられた・人間が獲得し得る “それらS”』として位置付けられています。

麥生田はこの「Artificial S」を5章に分類し、それぞれを深めるとともに、「S」の探求・実験・鍛錬として、撮影した写真をその日のうちにウェブサイト内「pile of photographys」(<http://hyogom.com>)にアップする行為を、2010年1月より現在まで9年以上に渡って、毎日途切れることなく続けています。

ギャラリー・パルクでは2014年の「Artificial S 2 / Daemon」以降、2015年に「Artificial S 3 / 後ろから誰か(他の)がやってくる」、2016年に「Artificial S 1 / 眠りは地平に落ちて地平」、2017年に「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」、2018年に「Artificial S 5 / 心臓よりゆく矢は月のほうへ」と、各章ごとの展覧会を5年連続で開催してきました。写真だけではなく映像やインスタレーションを交えた展示は、いずれも空間を支持体に、鑑賞者という身体が作品を媒介に接続され、「今、そこ(ここ)にあるイメージは、何か」という問いを起動させるものでした。

2018年、かくして「Artificial S」の展示における探求は全章を一巡し、ひとつの結節点を迎えました。そして現在、麥生田は「本」という空間に「Artificial S」を展開することに取り組んでいます。

これまでの「Artificial S」の展示において「イメージ」は、写真を主とした目に見える「像」を指すだけではなく、空間や身体、音や言葉といった「映像(時間)」や、鑑賞者の内に発生する「(想)像」にも及ぶものでした。そうして展示という「経験・体験」は、鑑賞者の内にイメージを「生成」し、「そのイメージとは何か」の問いは鑑賞者が自らにも発するものとなっていました。では、それらが本(写真集)となればどうでしょう。鑑賞者にとって「イメージ」は紙の上の「像」を容易に指し、想像はそこに「すでにある像」の解釈へと振り向けられ、それらは多く「消費」される対象ともなりえます。しかし、展示が「今(わたし、時間と空間、社会)」に打ち込まれる即応的なものであるとするなら、本は長きにわたって変化していく「歴史」を背景に、その検証の指標としてより深く打ち込まれるものであると云えるかもしれません。

本展「像を耕す」は、麥生田にとってこの違いを確認するとともに、ここから何が始められるのかについての手がかりを求める機会であり、制作・展示・思索・議論の場と機能を会場内に構築するものです。また、編集者・櫻井拓(さくらい・ひろし)とデザイナー・大西正一(おおにし・まさかず)との本づくりに向けたチームとして、この場・機会を共有しながら、互いの眼差しの差異や新たな可能性を模索する機会ともなります。

3つの階層を持つギャラリー・パルクに展開する「像を耕す」は、下層となる2階展示室は「Artificial S」各章の初源的なエッセンスを持った「像」が点在する空間であるとともに、麥生田の撮影・制作スタジオとして、会期中に様々なイメージが生成される場となります。ここは常に麥生田によって攪拌され、瑞々しくも泥々の「像」が湧き上がる源泉のような場であるといえます。中層となる3階はアーカイブの場として、いまだ目的や紐づく歴史を持たない未分化な痕跡がアーカイブ(記録)されるストレージとなります。上層となる4階は櫻井・大西の編集や制作スタジオであり、3名による本づくりに向けた制作の場として、また多くの対話者を招いたトークやレクチャーの会場として機能します。また、最終日にはこうした試行錯誤や検証の過程を経て、これからつくる「本」のプランがプレゼンテーションされます。

深く掘る、高く盛る、岩盤に当たる、埋もれる、嵌る、埋め戻す、途方に暮れる、お宝を掘りあてる、ガラクタを掘りあてる、種を蒔く、途方に暮れる、何かを打ち込む、何もしない、何もすることがない、耕す、穿る、突っつく、で、これからなにをしようか。こうして担う役割や機能の異なる3名(と私たち)が、ひとまず像を耕し、互いの手つきを見せ合い、互いの差異を眼差すことで、3名(と私たち)が何を実りとして手にするのでしょうか。

会期中、トークやレクチャーなどへのご参加も合わせて、何度も足をお運びいただき、一緒に考えていただければ幸いです。

# 像を耕す

パブリッシング・スタジオ

\*本展「像を耕す」に設置されている展示物にはお手を触れないでください。  
\*ただし、2階および4階の一部の作品・資料は触れていただくこと、読んでいただくことが可能です。  
\*会期中、幾つかの書籍やドリンク類の販売を行っております。お求め際はスタッフにお声がけください。

## 麥生田 兵吾 | Hyogo Mugyuda

### 写真

#### 写真性について ―― 制作の前提として

写真は、映像のある内側だけを注視するときと、映像の外側を意識するときとは異なる体験を人に与える。 ― 写っている像に心が重なること、世界の断片としてそれに心が向い合うこと。

映像と物質との関わりが、写真の内容をも変質させる。 ― スクリーンに投影される、紙に印刷される、ざらざらつるつるという表面の質感、重さ、そして古さ傷み。体や皮膚がそれに反応すること。

写真に出会う場所が、写真を拡張または制約する。 ― 人と写真と場所が交差する機会におきるイメージには、ほとんど無限の在り方がある。

人々はそれぞれの記憶と歴史と気分を、写真と写真のある風景に照らす。 ― により人は自身の思いを映像に投げかけている。映像も人に印象を押し付ける。思いは写真を変質させ、写真も思いを変質させる。

1976	大阪に生まれる	現在、大阪府在住
2018	個展「Artificial S 5 / 心臓よりゆく矢は月のほうへ」(Gallery PARC)	グループ展「アーカイブをアーカイブする」(みずのき美術館 / 京都)
2017	グループ展「HAPPY SPOT FUTURE」(奈良県文化会館)	個展「Artificial S 4 / 左手に左目   右目に右手」(Gallery PARC)
	グループ展「showcase #番外:スナップショット、それぞれの日々」(galleryMain / 京都)	
2016	グループ展(企画)「scene   space」(STUDIO MONAKA / 京都)	
2016	グループ展「showcase #5 “偶然を拾う- Serendipity”」(eN arts / 京都)	
2016	グループ展「Emerging KG+ 2016 supported by LUMIX x YellowKorner」( ロームシアター京都)	
2016	個展「Artificial S 1 “眠りは地平に落ちて地平”」(Gallery PARC)	
2015	個展「Artificial S 3 / Someone (Another one) comes from behind. “後ろから誰か(他の)がやってくる”」(Gallery PARC)	
2014	個展「Artificial S 2 / Daemon」(Gallery PARC)	グループ展 「2014 FOIL AWARD in KYOTO」(FOIL GALLERY / 京都)
	キャノン写真新世紀2014 佳作受賞 清水穰選	
2013	グループ展「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフーロール / 京都、Gallery PARC)	
2011	「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS / 東京)	グループ展 「in the waitingroom」(waitingroom / 東京)
2010	「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010」(3331千代田ARTS / 東京)	「pile of photographys」をweb上で発表開始(現在まで継続中)

主な出版
2014 雑誌「FOIL vol.4(2014) FOIL AWARD in KYOTO」に作品掲載
http://hyogom.com

## 櫻井拓 | Hiroshi Sakurai

### 編集

昨今、スマートフォンやタブレット端末、写真を共有できるSNSや動画投稿サービス、VRなどの普及により、「イメージ」は、かつてないほどに私たちの生活を取り巻き、その基盤を形作っています。その結果として私たちは、イメージに「慣れっこ」になり、その正体を問い返すことをしなくなってしまうのではないのでしょうか。

写真家の麥生田兵吾はこれまで、写真を空間の中で扱う展示手法を通じて、鑑賞者を、イメージという存在にもう一度「邂逅」させようとしてきました。

今回、麥生田は、その手法の延長上で、「本」という新しい空間を扱います。

麥生田の写真作品のシリーズ「Artificial S」は、「生と死」という主題の下、人が自明としている「まなざし」を把握しなおし、鑑賞者の感覚や記憶、身体を喚起しようとしてきました。今回の展示では、麥生田のこのシリーズを起点に、編集者の櫻井拓、デザイナーの大西正一が加わり、本をつくることを始めます。ギャラリーを出版(publish)のための制作スタジオへと変容させ、その作業空間を公開(publish)します。

ギャラリーは撮影、印刷、編集の作業場となり、作家と編集者、デザイナーが立ち代わって滞在し、共同作業を行ないます。本のための新しい印刷物に加えて、麥生田の過去作品やアーティストブック、櫻井が過去に編集した作品集や執筆したテキスト、大西がこれまでに手がけた写真集なども展示します。さらに会期中に開催する多数のイベントの映像や写真、音声による記録を交え、制作空間を立体的に展開します。

会期末には、培った成果を書籍のプランへとまとめ、展示とトークの形でプレゼンテーションします。

編集者。フリーランス。1984年宮城県生まれ。アートの分野を中心に、作品集やアートブック、展覧会カタログなどの印刷物を編集。これまでの仕事に、瀬尾夏美『あわいゆくころ 陸前高田、震災後を生きる』(晶文社、2019年)、『ゴードン・マッタ＝クラーク展』(東京国立近代美術館、2018年)、『引込線2017』(引込線実行委員会、2018年)、『池内晶子 | Akiko Ikeuchi』(gallery21yo-j、

2017年)、『〈見ること〉と〈写真を見ること〉 若江漢字に照らして』(カスヤの森現代美術館、2016年)、北島敬三＋豊島重之『種差 四十四連図』(ICANOF、2013年)など。

## 大西正一 | Masakazu Onishi

### デザイン

デザイナー。1980年京都府生まれ。タイポグラフィを軸に置きながら、印刷技術を駆使して、コンセプトを立体的に実現するデザインを展開している。主な仕事に、山沢栄子『私の現代』(赤々舎、2019年)、Mr.Children『Your Song』(文藝春秋、2018年)、竹内万里子『沈黙とイメージ』(赤々舎、2018年)、畠山直哉『まっぶたつの風景』(赤々舎、2017年)、ウィリアム・フォックス・トルボット『自然の鉛筆』(赤々舎、2016年)、ウィリアム・ホガース『“描かれた道徳”の分析』(伊丹市立美術館、2016年)、新井卓『MONUMENTS』(PGI、2015年)など。

## 現在予定しているイベント

### オープニング・レセプション

<b>2019年8月30日(金)</b>	<b>19:00～21:00</b>
<b>入場無料、予約不要</b>	
会場に展示している、画像生成の装置を麥生田がリアルタイムで操作するビデオ・パフォーマンス。	
トークイベント: <b>“歴史”とイメージ</b>	
<b>2019年9月8日(日)</b>	<b>19:15～21:00</b>
<b>ゲスト:田中希生(歴史学、奈良女子大学助教)</b>	
<b>入場料:1000円 要事前予約(ギャラリー・パルクHP内、予約フォームからのみ受付)</b>	
歴史学者のまなざしから、社会に遍在しているイメージについて語っていただきます。	

トークイベント: <b>現代におけるイメージ 『インフラグラム』『風景論』を起点に</b>	
<b>2019年9月12日(木)</b>	<b>19:15～21:00</b>
<b>ゲスト:港千尋(写真家、著述家)</b>	
<b>入場料:1500円 要事前予約(ギャラリー・パルクHP内、予約フォームからのみ受付)</b>	
最近の著書『インフラグラム 映像文明の新世紀』(講談社、2019年)『風景論 変貌する地球と日本の記憶』(中央公論新社、2018年)を入口に、現代におけるイメージのあり方についてお話をうかがいます。	

トークイベント: <b>「風景」のむこうへ</b>	
<b>2019年9月13日(金)</b>	<b>19:00～21:00</b>
<b>ゲスト:木岡伸夫(哲学・倫理学、関西大学教授)</b>	
<b>入場料:1000円 要事前予約(ギャラリー・パルクHP内、予約フォームからのみ受付)</b>	
『風景の論理 沈黙から語りへ』(世界思想社、2007年)を出版されている、哲学者の木岡伸夫氏をお呼びし、風景について、哲学的観点からお話しいたできます。	

トークイベント: <b>写真集出版のためのプレゼンテーション展示</b>	
<b>2019年9月14日(土)、15日(日)</b>	<b>11:00～19:00</b>
<b>入場無料、予約不要</b>	
会期中に培った成果を、書籍のプランへと具体化し、プレゼンテーションする展示を行ないます。	

トークイベント: <b>クロージング・プレゼンテーション</b>	
<b>2019年9月15日(日)</b>	<b>16:00～18:00</b>
<b>入場無料、予約不要</b>	
写真家の麥生田と編集者の櫻井が、デザイナーの大西を聞き手に、書籍のプランをプレゼンします。来場者のかたにも自由にご質問、ご発言いただけます。	